

「ベガー・マイ・ネイバー」の文脈をさぐる

中田 元子

はじめに

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens 1812-70) の『大いなる遺産』 (*Great Expectations* 1860-61) 第8章で、初めてミス・ハヴィシャムの館を訪れた主人公ピップは、少女エステラと、自分が知っている唯一のカードゲームである「ベガー・マイ・ネイバー (Beggar My Neighbour)」をする。¹ 『大いなる遺産』において、このゲームは、ピップが自らの階級への不満、階級上昇への憧れを抱く契機を与えるものとなっている。一方、『大いなる遺産』が雑誌『オール・ザ・イヤー・ラウンド』 (*All the Year Round*) に連載中だった1861年3月、諷刺雑誌『パンチ』 (*Punch, or the London Charivari*) には、フランス皇帝ナポレオン三世とイギリス首相パーマストンがこのゲームに興じるカートゥーン²が掲載された。英仏による軍艦建造競争を「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームに見立てて諷刺したものである。それから28年後、再び『パンチ』に同名のカートゥーンが掲載される。今度は、ロンドンで起きたドック・ストライキをめぐる労使の争いがこのゲームにたとえられている。この他にも、異なる状況についてこのゲーム名が比喩として用いられることがあった。³ 現在では、「ベガー・マイ・ネイバー」はもっぱら経済学用語として用いられているが、⁴ 本論では、この「隣人を乞食にせよ」というキリスト教精神にもとる行為を名前に持つゲーム名が、19世紀イギリスの人々の心にどのような含意を持つものとして訴えかけたのかについて考察する。

1. 『大いなる遺産』における「ベガー・マイ・ネイバー」

1860年12月1日から、週刊誌『オール・ザ・イヤー・ラウンド』では編集者ディケンズ自身の筆になる『大いなる遺産』が連載されていた。その連載第5回、1860年12月29日号で、村の鍛冶屋の子どもである主人公ピップは、近くの町の裕福な女性ミス・ハヴィシャムの屋敷に連れて行かれる。ハヴィシャムは子どもが遊んでいる姿を見たいと言い、ピップに何か遊びをして見せるように命じる。しかしピップは、わけもわからず連れて来られた陰気な屋敷で、不気味な女から唐突に遊べと言われても何もできない。それを見て取ったハヴィシャムは、養い子のエステラを呼んで一緒にトランプで遊ばせようとする。

"Let me see you play cards with this boy."

"With this boy? Why, he is a common labouring-boy!"

I thought I overheard Miss Havisham answer – only it seemed so unlikely –

"Well? You can break his heart."

"What do you play, boy?" asked Estella of myself, with the greatest disdain.

"Nothing but beggar my neighbour, miss."

"Beggar him," said Miss Havisham to Estella. So we sat down to cards. (Ch. 8)

エステラにとっては、労働者階級の子どもなど軽蔑の対象でしかなく、彼女は初めピップと遊ぶことに抵抗を示す。しかし、ピップが聞き違いかと思ったハヴィシヤムの"You can break his heart"という耳打ちによって、単なるトランプ勝負に別の目的が加わり、エステラはテーブルに向かう。ピップが知っている唯一のトランプ・ゲームが「ベガー・マイ・ネイバー（隣人を乞食にせよ）」だったことは、ハヴィシヤムに格好の応援文句を提供することになる。

ここで19世紀のイギリスで、このゲームがどのような種類のものとみなされていたかを確認しておきたい。ロバート・ハービンによれば、これは「小さな子どもに最適の遊び」とのことである(120)。ピップがこのゲームを知っていたのは、育ての親である義兄のジョーや近所の子どもたちと遊んだことがあったからだろう。このときピップは10歳ぐらいだが、それよりは少し年かさの少年たちもこのゲームで遊んでいたことが次のような記録からわかる。1833年9月21日付の『タイムズ』「警察"Police"」欄には、14歳を最年長とする4人の少年グループが「ベガー・マイ・ネイバー」でギャンブルをしていた容疑で簡易裁判にかけられたという記事が掲載されている。少年たちは、ギャンブルをしていたわけではなくただ遊んでいただけだと主張し、今後親が十分に監督するという条件で、無罪放免になった(4)。いずれにせよ労働者階級の間では知られたゲームだったと推測できる。

一方、このゲームはミドルクラス以上の階級でも行われていたようである。1830年の下院議会文書では、ブラッグというポーカーに似た当時はやりのゲームと共に、土地持ち階級の遊びとして言及されている(House of Commons Papers 161)。また『大いなる遺産』が完結した直後の時期にあたる1861年10月末にウリッジ陸軍士官学校で待遇に不満を持つ生徒たちの反乱が起きたが、それについて11月26日付の『タイムズ』投書欄では、生徒たちに同情的な筆者が、21歳、22歳の若者たちが「ベガー・マイ・ネイバー」のようなくだらぬゲームにふけらなくてすむよう、運動場などの施設を整えるべきだと主張している("The Woolwich Inquiry" 12)。

これらのことから推測されるのは、このゲームは決して上品なゲームではなかったが、階級の下上を問わず行われていたということである。ハヴィシヤムからピップと遊ぶよう命じられたエステラが、労働者階級の子どもと遊ぶことに抵抗は示しても、ゲーム自体に異議を唱えていないのはこのためだろう。ピップが遊べるのがこのゲー

ムだけだったということで選択の余地がなかったにせよ、エステラにとってもとくにこれが卑しい労働者階級のゲームとは受け止められていなかったと推測できる。⁵

このとき二人はこのゲームを二度行い、ハヴィシャムの応援に報いるかのごとく、エステラは二度ともピップを負かす。この後、ハヴィシャムの館を再訪したときにもまた同じゲームをし、ピップは「同じように一文無しにされた」(11章)。このゲームは基本的には運任せのゲームなので、どちらにも同じように勝ち負けのチャンスがあったはずである。しかしこの物語において、常にエステラが勝ちピップが負けるという結果は、持てる者が一方的に富を蓄え、持たざる者はただただ貧乏になるという、産業資本主義の富の分配の不均衡を象徴しているようである。

持てる者エステラによる持たざる者ピップの支配は、物質面のみならず精神面にも及ぶ。ピップはエステラによってゲームで一文無しにされるだけではなく、感情の面でも支配を受けるようになるからである。そこには通常とは逆のジェンダー支配の様相も加わる。初めて会ったエステラの態度は終始ピップをバカにしたものだが、それにもかかわらずピップのなかには美しいエステラへの憧れが生じてしまう。ゲームの最中、「ネイヴ」と言うべきところをピップが「ジャック」と下品な言葉を使ったと、エステラはあからさまに軽蔑してみせる。エステラの態度に反感を覚えながらも、大好きな義兄のジョーがなぜ間違った言い方を教えたのだろうと、それまでは横暴な姉のミセス・ジョーに団結して対抗する同志とも思っていたジョーに対して、軽い恨みにも似た気持ちがピップの心にのなかに湧き上がる。エステラへの憧れが原因となって、それまでは何とも思っていなかった自らの階級に対する嫌悪感が芽生え、ピップはエステラに認められるジェントルマンになりたいと思い始めるのである。

このように、『大いなる遺産』の「ベガー・マイ・ネイバー」は、金銭の多寡による階級支配の様をあからさまに示すと同時に、女による男の支配の様態も示している。そしてここにこそ、ハヴィシャムの"Beggar him."という言葉の真意があったと言える。かつて、全身全霊で愛し結婚の約束をした男に結婚式の朝だまされていたと知った経験を持つハヴィシャムは、結婚衣装を着たまま時を止めて亡骸のように生きているが、エステラを養女にしてから、彼女を手段として男たちに復讐する事を思いつく。エステラを、外見は美しいが心は冷たい高慢な娘になるよう育て、男たちに復讐すること、それがハヴィシャムの生き甲斐となる。ピップがエステラに初めて会うこの場面は、ピップがハヴィシャムの復讐の最初の犠牲者になることが運命づけられる場面である。ピップはトランプ・ゲームによってまずは物質的に一文無しにされ、次にはエステラの美しさに心まで奪われてしまう。エステラへの憧れによって、ピップは何の見込みもないのに紳士になりたいと思い始め、せめてもの準備として読み書きの勉強に身を入れるようになる。匿名の人物から思いがけなく財産を贈られることになり、本当に紳士になれると知ったとき、この匿名の人物がハヴィシャムであると

信じて疑わず、またハヴィシヤムもその勘違いを助長するので、自分はエステラの夫として育てられるのだと思い込んでしまう。エステラが、自分は優しい気持ちは持っていない(29章)、自分にひきつけられないようにとピップに忠告する(38章)のも聞かず、エステラは自分に与えられるものと信じて思いを募らせてゆく。エステラがドラムルとの結婚を告げるに及んで、ピップはやっとエステラが本気で忠告していたのだと知り、心を打ち砕かれる。こうしてピップは「ベガー・マイ・ネイバー」というハヴィシヤムが企てた男たちに対する復讐ゲームの犠牲者となるのである。

ハヴィシヤムはエステラを代理として男たちに復讐することを生き甲斐とするが、これによってハヴィシヤムは勝者としての満足を得ることができたのだろうか。成長して社交界に出たエステラは、ハヴィシヤムに教えられた通り、男たちを虜にしては冷たくあしらうということを繰り返す。ハヴィシヤムは、エステラが魅惑した男たちの名前や身分を聞き出しては満足を得る。しかし、ハヴィシヤムが精力を傾けて育てたエステラの高慢さや冷酷さは、ハヴィシヤム自身にも返ってくる。ハヴィシヤムの愛情の身振りを拒否したことをとがめられたエステラは、優しい気持ちに応えることは教えられなかったと冷たく返答する(38章)。その態度にハヴィシヤムは激昂するが、ここで彼女はエステラが一番近くにいた「ネイバー」としてエステラの冷酷さの犠牲者となったのである。さらにエステラは、ハヴィシヤムの反対を押し切って結婚してしまうが(44章)、そうすると手段を失ったハヴィシヤムはもはや「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームを続けることはできない。また、ハヴィシヤムの復讐ゲームの、最初の、そして最大の犠牲者となったピップが、結婚を決めたエステラに対して心情を吐露する様子を見て、ハヴィシヤムはかつて自分が持っていた純粋な愛情を思い出し、自分がピップとエステラに対して取り返しのつかないことをしたことに気付く。ハヴィシヤムは、ひざまずいてピップに許しを乞い、その直後、古い婚礼衣装ごと燃え上がる(49章)。このようにして、ハヴィシヤムの「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームは自らを滅ぼすものとなったのである。

『大いなる遺産』において「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームのエピソードが示しているのは、このゲームに関わる者は最終的に何らかの犠牲を被ることになること、このゲームに勝者はいないということである。「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームの勝ち方は相手を完膚なきまでに打ち負かすというものである。そのようにして関わる相手を完全に負かし続けた場合、最終的に生き残るのは自分だけになる。自分だけが生き残ったとしても、あとは自分が消滅するのを待つのみである。『大いなる遺産』の「ベガー・マイ・ネイバー」は、人間が生き延びるためには相互交渉が欠くべからざるものであることを皮肉な形で示している。

2. 『パンチ』の「ベガー・マイ・ネイバー」

『オール・ザ・イヤーズ・ラウンド』の読者がピップとエステラによる「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームの場面を読んだ三ヶ月後の1861年3月、『パンチ』に、その名も "Beggar my Neighbour" と題するジョン・テニエルによるカートゥーンが掲載された(図1)。ここでゲームをしているのはフランスのナポレオン三世とイギリス首相パーマストン。トランプの絵柄は三本マストの船。テーブル中央の場にはカードが積み重なり、ナポレオン三世はいましがたグロワールを切り札として出したところ。相手が何を出すのかと緊張した面持ちで見つめている。これに対してパーマストンはウォリアーを出す。真正面を向き、緊張した態度で勝負に臨んでいるナポレオン三世に対し、パーマストンのほうは半身に構え、口にはトレードマークのワラをくわえ、これでいかがかな、という表情。⁶パーマストンの左手手元には、これまでに獲得したと思われるカードが置かれている。二人の足下には賭け金として用意した金貨の袋がある。イギリスの方が多く見えるがそれほどの差はない。キャプションには、パーマストンの言葉として「陛下はこのばかげた遊びにお飽きになられませぬか」とある。

ルールに従えば、「ベガー・マイ・ネイバー」では手に札を持つことはなく、自分で出す札も選べないので、『パンチ』のカートゥーンはタイトル通りのゲームを再現しているとはいえない。「ベガー・マイ・ネイバー」が完全に運任せであるのに対し、二人がやっているゲームでは出すカードを選んで策を巡らすことができるからである。このようにルールが違っているにもかかわらず、それでもこのカートゥーンが「ベガー・マイ・ネイバー」という表題で意が通じるのはなぜだろうか。それは、ゲーム



図1 "Beggar My Neighbour," *Punch* 23 March 1861: 120.

の眼目が勝負の決まり方にあるからだと考えられる。すなわち二人が行っているゲームは、「ベガー・マイ・ネイバー」のように、勝った方がカードを全部取って一人勝ち、負けた方はすっからかんになるゲームだということである。そしてこのカートゥーンにおいては、パーマストンの態度とキャプション、その手元に置かれている獲得したカードなどによって、勝つのはイギリスであるということが暗示されている。

このカートゥーンの見開き反対ページには同名の詩が掲載されており、⁷ カートゥーンの場面を登場人物二人の言葉で補っている。まずフランス、ルイ・フィリップの方が建艦ゲームを仕掛ける。そのゲームを受けて立ったイギリス、パーマストンは、フランスが一隻造るのに対して二隻造ると大きく出る。フランスも承知しているようにイギリスの財布は潤沢なのだから。勝負の行方は財布の大きさにかかっている。イギリスの方はゲームを続けようと思えばずっと続けられるが、それは時間と金の無駄であり、どちらにとっても得にならない。だから、そちらがやめればこちらもやめる、この無益なゲームをやめよう、と提案している。

『パンチ』のカートゥーンと詩が示す構図は、フランスが正面切って建艦競争を仕掛けているのに対して、イギリスは上位者の余裕を見せて、相手に無駄な競争をやめるよう諭している、というものである。しかし詩の方にはカートゥーンにはないひとつの認識が表現されている。それはこのゲームがどちらにとっても、すなわち勝者にとってさえ得にならないゲームであるということである。イギリスは財政上の優位について自信を持っているので、決して負けることはないと考えてはいるが、"games that can do neither good,/ And may bring both to grief" と言っているところからは、このゲームはイギリスにとっても得にならないとの認識がうかがえる。「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームは、どちらかが一方的な勝ちを収めるゲームとは異なり、勝った方もかなりの犠牲を払う可能性があるものであると暗示されているのである。カートゥーンからこの認識を読み取ることはできない。

カートゥーンと詩には「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームについての認識の点で少し違いがあるが、それでもとくにカートゥーンのパーマストンの態度には余裕が見られる。実際にイギリスはフランスに対してそれほどの優位を保っていたのだろうか。次節では1850年代終わりから60年代初めにかけての英仏の関係、とりわけ建艦競争について概観することによって、この「ベガー・マイ・ネイバー」の意味するところをさらに深く理解したい。

3. 英仏の建艦競争

ナポレオン戦争終結から第一次世界大戦までの間、イギリスはパクス・ブリタニカを享受していたが、アンドルー・ランバートによれば、1858年と1865年の間にパクス・ブリタニカ最大の脅威に直面した (Lambert 9)。それを象徴するのが先のカー

トゥーンでナポレオン三世が出したグロワールである。ナポレオン三世は19世紀のフランスの指導者の中で、とりわけ海への関心と海軍への造詣が深かった。戦艦の技術革新を支えるため、国家予算に占める海軍予算の割合も大きくなり、それまで年平均6%程度であったものが、1853年から70年までの間は9.2%を占めるに至った(田所190)。このように海軍に力を入れた結果、蒸気船の導入でイギリスに先んじ、1858年には世界初の鉄装甲蒸気戦艦グロワールを完成させたのである。⁸

一方、イギリス海軍は、ナポレオン戦争後、平時の編成規模へと大幅に縮小されていた。そのようなときに、フランス、ロシアが海軍に野心を示し始め、またクリミア戦争時にはイギリス海軍の低調さが露呈された。さらには初の鉄装甲蒸気戦艦建造の栄誉をフランスに奪われ、イギリス海軍の優位がフランスに脅かされつつあるという懸念が広まり始める。1859年から二度目の首相を務めていたパーマストンは、もともと砲艦外交を押し進める強硬派だったが、1861年、当時の大蔵大臣グラッドストーンへの書簡で、「英仏間の平和と相互理解は、フランスが海軍力でイギリスをしのぐことがないときに最も恒久的なものになる可能性がある」(Lambert 24-25)と述べ、イギリス海軍が優位を保つことを主張した。これを反映するかのように、1861年のイギリスの海軍予算は1330万ポンドとなったが、これはその後1880年代後半まで越えられることのない額である(Mitchell 397)。⁹

一方、イギリス国内には、このようにフランス脅威説を唱えて国民の不安をかき立てることを批判する勢力も存在した。自由貿易主義者で穀物法廃止に貢献したりチャード・コブデン(Richard Cobden 1804-65)はその代表である。市場拡大を図ることは推進しても、そのために武力を使うことには反対だったコブデンは、"The Three Panics: An Historical Episode" (1862)と題されたパンフレットで、議会が、何も知らない国民のフランス恐怖をあおり、パニックを作り出していると批判した(Cobden 385)。同パンフレットでコブデンは、海軍の人員、軍事費などの統計数字を示して、フランスがイギリスにとって脅威ではないことを示そうとした。

また、フランスは軍備増強に力を入れているが、そのために予算を使いすぎて、財政が厳しくなっている、という認識もあった。1861年11月20日付の『タイムズ』にはフランスの濫費を諷める記事が載っている(6)。ナポレオン三世と大蔵大臣フルドの軍艦建造計画に警鐘を鳴らしているのである。フランスが軍艦を造れば、対抗して他国も造るので、いくら造っても無意味だという主旨である。この記事で、ナポレオン三世が軍事費に金をつぎ込む様子がディケンズの『大いなる遺産』でのピップと友人ハーバートの借金生活にたとえられているのが興味深い。ピップとハーバートは借金地獄に陥っているとき、借金をすべてリストアップして一覧表を作り、さらにそれに金額を上乗せして借金を大目に見積もることによって安心するという弥縫策を講じるが(第34章)、ナポレオン三世はそれを同じことをしている、というのである。『大

いなる遺産』はこの年の8月に雑誌連載が終わり、一卷本として出たばかりだった。ベストセラー作品のエピソードによって、読者が事態をより身近なものとして理解することを促したことだろう。

世界初の鉄製蒸気戦艦建造の栄誉をフランスに奪われたことが、世界一の海軍国を自認してきたイギリスに動揺を与えたことは容易に想像できるが、実は鋼鉄船の出現は、工業国イギリスに有利だったという側面もある。というのも、鉄だけで軍艦の船体を造ることができたのは、当時は工業力で抜きんでていたイギリスだけだったからである(田所 98)。グロワールは世界初の鉄製蒸気戦艦とはいっても、実際には木製の船体に鉄板を貼り付けたものだった。それに対し、グロワールの一年後に就役したイギリス軍艦ウォリアーは、鉄製の船体と装甲を持っていた。つまり、最初の建造という栄誉こそフランスに譲ったものの、木造船から鋼鉄船への変化は、結果的にイギリスの優位を確固たるものにする見通しを与えるものだったのである。グロワールによって、イギリス海軍の優位が一瞬揺らいだように思われたが、その後の建艦競争ではイギリスがすぐに優位を取り戻したと考えられていたようである。1864年2月1日付の『タイムズ』には英仏の鋼鉄製艦隊の比較記事が掲載されているが、ここでは、グロワールによって始まった鋼鉄製軍艦の製造競争において、イギリスは初め後れを取ったが、今では船の数、大きさ、性能いずれをとってもフランスが追従できないものを造っているとの満足感が示されている("Proposed New Ironclads" 6)。

このように見てくると、クリミア戦争後のイギリスにおいて、フランス海軍は実際には脅威とまでいえる存在ではなかったが、パーマストンは戦略的に脅威として仕立てあげ、軍備拡張の言い訳としたようだ。先の『パンチ』のカーตูนおよび詩でのパーマストンの余裕ある態度は、軍拡反対派の言うところを信じれば、現状からみて当然の態度であったということになる。しかし、現実にはパーマストンがフランスを必要以上に脅威として仕立てあげようとしていたとすれば、このカーตูนの態度は矛盾する。これについては、グロワール一隻に対してウォリアーとブラック・プリンスの二隻を作るような対応をしていればこのような余裕ある態度が保てるのだと主張し、今後も軍備を確実にしていく必要があることを国民に納得させるためであったと解釈することはできるかもしれない。

実は英仏の建艦競争を「ベガー・マイ・ネイバー」のゲームにたとえる比喩は、『パンチ』のカーตูนより二年近く前に、コブデン派によるパーマストン批判の中で使われていた。1859年4月13日にロジデールで開かれたコブデン支援集会で、応援演説をした同じマンチェスター学派のジョン・ブライト(John Bright 1811-89)は、コブデンの平和主義政策について述べるなかで、イギリスは大陸諸国政府に影響を及ぼして平和をもたらす努力をすべきなのに、こともあるうか、英仏海峡のあちら側とこちら側で建艦競争、すなわち「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームにうつつを抜かし

ている、と非難しているのである ("Mr. Bright and Mr. Cobden")。ブライトの批判は、1830年代から外務大臣や首相を歴任し、イギリスの外交政策を進めてきたパーマストンに向けられていることは明らかである。ここでは「ベガー・マイ・ネイバー」はどちらにとっても無益なゲームであることが強調されている。

このようなイギリス国内における対外政策をめぐる論争の文脈に置いてみると、『パンチ』のカーตูนについても別の解釈をすることができる。すなわちフランス対イギリスのゲームの勝ち負けが問題なのではなく、このゲーム全体、すなわち英仏の建艦競争そのものが批判の対象になっているとみることができるのである。しかし、ヴィクトリア朝の美術批評家スピールマン (M. H. Spielmann 1858-1948) によれば、ミドルクラスの多数派を意識していた『パンチ』は、コブデンではなくパーマストンを支持する立場をとっていたという (119)。スピールマンの見方にしたがえば、「ベガー・マイ・ネイバー」のカーตูน及び諷刺詩についても、フランスに対して絶対的優位を保つことを主張するパーマストンの態度を支持しているとみるのが妥当であるということになるかもしれない。

国際関係についての記事で「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームが比喩として用いられる場合、先に言及したブライトの演説におけるようにそれが双方にとって不毛なやり方であるという否定的意味合いで使われることが多い。「ベガー・マイ・ネイバー」式のやり方が肯定的にとらえられるのは、イギリスが他国に対して強硬政策をとるべきであるという主張に用いられるときだけである。したがって『パンチ』のカーตูนは例外的なものといえるのだが、そのカーตูนを引用した1886年2月27日付『タイムズ』掲載の投書「国防と安心 ("National Defences and the Relief of Distress")」もその数少ない例のひとつにあげられる。ここで投稿者はフランスとロシアの脅威を背景に、英国の商船を守るためには今のままの海軍では不十分であると主張し、1861年の『パンチ』のカーตูนに言及して、パーマストンの明敏さを今こそ思い出すときだと論じている (4)。すなわち、他国が海軍を増強するなら、それに負けられないような増強をイギリスも行うべきだということである。この時期、実際に海軍予算が増えていることを考え合わせると (Mitchell 397)、本気で他国に対して「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームをしかけることを良しとする世論があったと言えるだろう。

冷静に考えれば、国際社会の中で一人勝ちしても不毛なだけである。「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームによって他国をすべて破産させ、自国にすべての富を集めても、その後は取り上げたものを食いつぶすだけになり、やがては衰退していくことになるだろう。しかし、19世紀イギリスにおいては、このゲームが愛国主義的な主張を表すのに都合が良いと考えられたこともあったようだ。

4. 1889年の「ベガー・マイ・ネイバー！」

先のカートゥーンから28年後の1889年10月、再び「ベガー・マイ・ネイバー！」(今回は感嘆符付き)と題したカートゥーンが『パンチ』に掲載される(図2)。作者は1861年と同じテニエルで、画面中央のテーブルに向かって二人の人物がカードゲームをしているという構図も全く同じである。ただし、今回対戦しているのは労働者と経営者である。労働者がストライキという切り札を出したのに対して、経営者の方はロックアウトを切り札として出している。左側に描かれた労働者は、1861年の図のナポレオン三世と同じように身を乗り出し、見るからに真剣である。右側に座る経営者の方は、パーマストンと同じように半身に構えている。経営者の姿勢はパーマストンと同じように優位者の余裕を示しているのだろうか。身なりやタバコ、アルコールの種類から、両者の金回りの違いは明らかである。しかし、パーマストンが手元に勝ち取ったカードを重ねて優勢を示していたのに対して、このカートゥーンでは両者とも持っているのは手持ちの札だけであり、それも同じような枚数を持っているように見える。勝敗の行方は定かではない。このカートゥーンの対面ページには1861年の場合と同じように同名の詩が掲載されている。その趣旨は労使双方に譲歩を促すものである。労使はギブアンドテイクのルールにしたがって、「ベガー・マイ・ネイバー」を止めなければならない。さもなくば、もう手遅れというときになって、両方ともが損をするゲームだと気がつくことになろう、と書かれている(174)。カートゥーンではどちらが優勢かわからないが、実際にこの詩から両者共後に引かず対抗しているということがわかる。



“BEGGAR MY NEIGHBOUR!”

図2 “Beggars My Neighbour!” *Punch* 12 Oct. 1889: 174.

実はこのカートゥーンの登場人物は、これより約一ヶ月前の9月7日号にすでに登場している。それは「差し向いで!」と題するもので、場面は労働者と経営者が街角で出会ったところである(図3)。半身で逃げ腰の経営者に対して、労働者の方は腕組みをして断固たる態度である。キャプションには、労働者の言葉として「わからずやにはなりたくないんだ。だが、もうちょっとそちらさんの贅沢品じゃなくてこっちの必需品のことを考えてくれりゃ、仕事は万事うまくいくんだがな」とある。対面ページに掲載されている同名の詩でも、煽動者やストライキからは一步距離を置いた労働者が、生活に必要な給料さえ貰えれば、そちらがいくら贅沢をしようと構わない、とあくまで正当な賃金の支払いを求めている。¹⁰この同じ労働者は、次週9月14日号の同じくテニエルによる「金の卵を産むホロホロチョウ」というタイトルのカートゥーンにも登場する(図4)。このカートゥーンにおいて、この労働者は、資本家、仕事、労働者のすべてを一体化しているホロホロチョウを、ストライキというナイフで殺そうとして、厳しい顔つきのパンチ氏に止められている。キャプションにはパンチ氏の言葉として、「落ち着け! もしそれを殺したら、だれが一番困ると思う?」とある。¹¹この後に本節の最初に見た10月12日号の「ベガー・マイ・ネイバー!」がくるのである。これら三点のカートゥーンはわずか一ヶ月余りの間に発表されたものだが、描かれた労働者の姿勢には変化がある。最初、組合やストライキから距離を置いていた



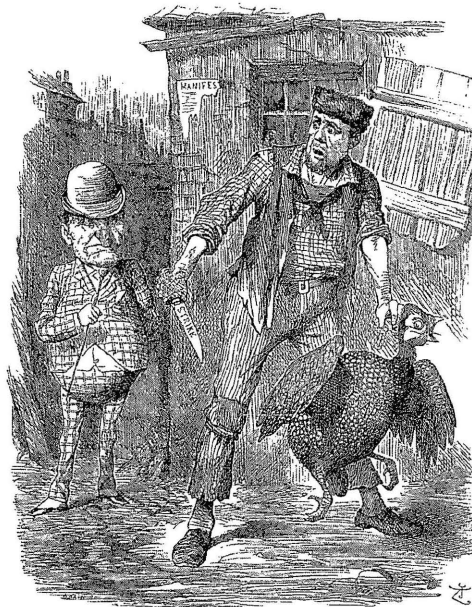
FACE TO FACE!

WORKING-MAN to Employer. "I DON'T WANT TO BE UNREASONABLE, BUT IF, IN A GENERAL WAY, YOU'D THINK LESS OF YOUR LUXURIES AND MORE OF MY NECESSITIES, IT WOULD BE BETTER FOR TRADE ALL ROUND."

図3 "Face to Face!" *Punch* 7 Sept. 1889: 115.

労働者が、経営側の対応の悪さにしびれを切らし、短期間のうちに過激な行動も辞さない決意をもつようになっていったという変化である。

これらのカートゥーンが作成されるきっかけとなったのは、掲載時期に行われていたロンドン・ドック・ストライキだろう。このストライキの背景と経過について簡単にまとめてみよう。¹² 当時、熟練労働者には職能別労働組合があったが、非熟練労働者は組織されていなかった。港湾労働者の間でも、機械工、造船工、大工、艀装者などの熟練労働者には組合があったので労働条件などについて経営側と交渉する手段があったが、荷揚げなどに関わる非熟練労働者は、仕事のあるときに日雇いで雇われるだけで雇用が不安定なうえ、賃金も経営者側の言いなりだった。そのような港湾労働者を組織化させるきっかけとなったのは、同じロンドンで前年7月に起きたマッチガール・ストライキである。アニー・ベサントの告発によって始まったマッチ製造工場女性労働者のストライキは、非組織労働者が起こしたストライキとしては初めてのものだったが700人近くの参加者があり、二週間後労働者たちは勝利した。続いて1889年3月にはやはりロンドンでガス労働者のストライキが起こった。彼らは当時12時間交代制だったが、一日8時間労働を要求し、経営者側はこれを認めた。このような運動の成功に刺激されて、1889年8月14日からロンドン・ドックの港湾労働者がストライキに入った。時給5ペンスから6ペンス（時間外勤務は8ペンス）への



THE GUINEA-FOWL, THAT LAYS THE GOLDEN EGGS.

(Keep slightly altered.)

MR. P. "DON'T LOSE YOUR HEAD, MY MAN! WHO'D SUFFER MOST IF YOU KILLED IT?"

図4 "The Guinea-Fowl that Lays the Golden Eggs" *Punch* 14 Sept. 1889: 127.

賃上げ、最低4時間の就業時間確保などを求めて1万人もの労働者が職場放棄したのである。経営者側は株主の不興を買うのを恐れて要求に応じようとしなかった。労働側はあくまでも要求を勝ち取ることを求めストライキを続けていたが、四週目に突入した9月初め、資金が底をつき、ストライキの継続はもはや不可能かと思われた（このころ『パンチ』に「差し向いで!」掲載）。ぎりぎりのところで、オーストラリアの港湾労働組合からのカンパが届き、ストライキを継続する目処が立った。一方で同時期の9月5日、ロンドン市長は市長官邸委員会を招集し、事態の收拾に向けて協議した。ここで中心的役割を果たしたのがカトリックのマニング枢機卿である。港湾労働者のなかにカトリック信者が多いということもあって、ストライキ側に同情的だった枢機卿は、労働者の要求を受け入れてストライキを終わらせるよう経営者側を説得した。この調停を受けて、経営者側は労働者の賃上げ要求を受け入れ、ストライキは終結。9月16日に労働者は仕事に戻った（この少し前に「金の卵を産むホロホロチョウ」掲載）。

テニエルの三点のカーตูนがドック・ストライキを受けて描かれたものであることは否定できないだろう。しかし現実のドック・ストライキの成り行きと『パンチ』のカーตูนをくらべるとずれがあることに気付く。雑誌の印刷出版に必要な時間を考えれば、時間的なずれは生じるのが当然である。しかしそれは最小に抑えようと思えば可能であることは、スト終結直後の9月21日号にドック・ストライキにおけるマニング枢機卿の働きを描いたイラストが掲載されているのを見てもわかる(137)。『パンチ』におけるテニエルの三点のカーตูนの生み出す違和感は、単に時間的なずれの問題ではない。三点のいずれにおいても、労働者が実際にストライキに突入したこと、とりわけ労働者が勝利したことが描かれていないことが違和感をもたせるのである。初めの二枚のカーตูนが掲載されたとき、すでにストライキは行われていた。にもかかわらずそこに描かれているのは、ストライキを回避したい、させたいという願いである。三枚目のカーตูน「ベガー・マイ・ネイバー!」が掲載されたとき、ストライキはすでに終結していた。しかしそこに描かれているのは、ストライキとロックアウトの応酬である。このようなずれはなぜ生じたのだろうか。

「ベガー・マイ・ネイバー!」についていえば、一般論としては確かにこのカーตูนは正論を示している。労働者があくまでもストライキを続ければ、たとえ低賃金であってもそれすら手に入らなくなりすぐに食うに困る事態になる。経営者側にしても、労働者の要求を拒んでロックアウトを続ければ、働き手を失って工場が操業できなくなり、利益が得られなくなる。しかし、ドック・ストライキについては全面的に労働者の訴えが認められた。明らかに経営側に改善の余地があったということである。それにもかかわらずカーตูนでは労使双方に向けて自制・妥協の要請がなされている。なぜこの時期にこのような現実を反映しない表現がなされたのだろうか。これを

説明するためには『パンチ』がミドルクラスの雑誌であったということを思い出すことが必要だろう。心情的には、苦しむ労働者階級に同情するものの、それでも利害関係を考えた場合明らかに経営側に属するミドルクラスとしては、ストライキは歓迎できるものではない。1880年代後半は労働運動に勢いがあり、ストライキも続発していたが、つねに労働者が勝つわけではなく強硬な姿勢を取る経営者もいた。¹³このような状況におけるミドルクラスの懸念が「ベガー・マイ・ネイバー!」に表現されているのではないだろうか。ストライキやロックアウトといった隣人を乞食にして自分だけが勝者になろうとする手段に訴えて、あげくの果て結局両方共が損をすることのないよう戒めること、それがこの、ドック・ストライキの結果を直接反映していないカートゥーンの目的ではないかと考えられる。

おわりに

カードゲームとしての「ベガー・マイ・ネイバー」は、手腕に関係なく、偶然の成り行きによって、ひとりのプレイヤーがカードを全部取って勝負が決まるゲームである。本論では、このゲームが19世紀イギリスでどのような含意を持つものとして人々に受け入れられていたのかを、ディケンズ『大いなる遺産』と『パンチ』のカートゥーンおよび諷刺詩をもとに考察した。

『大いなる遺産』の場合、エステラを手段として使うハヴィシャムの「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームは、ハヴィシャムの男性に対する復讐ゲームとして機能していた。男の心を虜にしては冷たく切り捨てるエステラによってピップは最初の犠牲者になった。次々と同じことを繰り返したエステラだが、ある時点でその役目に嫌気がさし、結婚という形でゲームから降りてしまう。ハヴィシャムはエステラを自分の代理として操っていたはずだが、同時に一番近い隣人という立場でもあったため、エステラの反乱によって手ひどい痛手を被る。『大いなる遺産』では、「ベガー・マイ・ネイバー」はだれか一人が大勝ちするゲームではなく、すべての関係者が損害を被るゲームとなっている。

一方、1861年の『パンチ』カートゥーンの場合は、イギリスが建艦競争で劣位に置かれかけていたという状況ゆえに、目前の勝敗だけに集中した愛国主義的なものになっている。しかし、国際関係における「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームに対する批判は、同時期にもなされている。その他の使用例を見ても、さまざまな利害関係の対立した場面における不毛なやり方を表現するときに使われる場合がほとんどであるので、相手を打ちのめすことを奨励する使い方は例外的であるといえる。

1861年のカートゥーンを描いたテニエルは、1889年に再び同じ構図で同名のカートゥーンを描いた。このカートゥーンが描かれたのは港湾労働者のストライキによって労働者側に勝利がもたらされた直後だった。それにもかかわらず労働者と経営者の

対立を中心に据え、それが「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームであることを強調している。これからも続くであろう労使の対立について、ストライキとロックアウトの応酬による「ベガー・マイ・ネイバー」はだれにとっても得にならないやり方であると論じ、互いに妥協し歩み寄ることを旨とすべしと促しているのである。これについては『パンチ』がミドルクラス対象の雑誌であったということが影響していると考えられる。

「ベガー・マイ・ネイバー」というゲームが比喩として使われた場合、人々に了解されると前提されているのは、それが隣人からすべて奪って一文無しにし、自分だけが栄えるやり方であるということである。それは倫理的に許されない行為であり、しかも、双方がそのゲームに勝とうとしてあくまでも戦い続ければ、共倒れになる可能性も高い。当然、それは批判的に用いられることが多いが、状況と立場によっては、称賛されるべき積極的態度を表す比喩にもなった。勝ち負けがはっきりしたゲームだけに、勝ったときに得られると思われる絶対的優越感の幻想はヴィクトリア時代の人々にとって魅力あるものだったのかもしれない。

注

¹ Beggar My Neighbour (別名としては Beggar Thy Neighbour, Beggar Your Neighbour, Beat Jack Out of Doors, Beat Your Neighbour Out of Doors, Beat Your Neighbour Out of Town, Strip Jack Naked などもある) のルールは次の通り。遊ぶ人数は二人以上だが、ここではビップとエステラを想定し、二人で行うものとする。全部のカードを均等に配り、それぞれのプレイヤーは自分のカードを裏向きのまま重ねてデッキを作る。プレイヤーは順番に、デッキの上から一枚ずつ表に返して場に出す。出た数字が2から10までの場合は、そのまま交互に一枚ずつ出して重ねていく。J、Q、K、Aのいずれかが出た場合、相手は、Jに対しては1枚、Qなら2枚、Kなら3枚、Aなら4枚を「支払」わなければならない。支払われたカードがすべて2から10までのカードだった場合は、支払いを受けていたプレイヤーが場にある全てのカードを取ることができる。取ったカードはそのままひっくり返して自分のデッキの一番下に加える。しかし支払いの最中にJ、Q、K、Aのいずれかが出た場合、その時点から今度は支払いを受けていた側が支払いをしなければならなくなる。このようにして、どちらかがカードを全部とるまで続けられる(Harbin 120-21)。カードはテーブル上に置いたままであり、自分で出すカードを決められないので、完全に運任せのゲームである。

² 『パンチ』では一ページ大の諷刺画をカートゥーンと呼んでいる。もともと壁画などの下絵を意味した cartoon が諷刺画の意味で用いられるようになるにあたって『パンチ』が果たした役割については Spielmann 187-88 参照。

³ 『タイムズ』の記事で「ベガー・マイ・ネイバー」が使われている例をいくつか拾ってみよう。1864年2月20日付の「特派員報告 "Foreign Intelligence"」欄フランス特派員からの記事では、シュレースヴィヒ・ホルシュタインをめぐるプロシア・オーストリア連合軍とデンマークとの戦争のことを「ベガー・マイ・ネイバー」ゲームと呼んでいる(9)。1870年1月15日付の記事では、軍縮を唱えるホバート卿が英仏の軍拡競争を「国際的ベガー・マイ・ネイバー」と呼んだことが報道されている("Lord Hobart on Disarmament" 4)。以上は国際関係記事だが、国内記事では保護貿易派が自由貿易を "a gigantic game of beggar my neighbour" (May 2, 1849) と呼ん

だ例や、鉄道会社経営部の株主に対するやり方 ("Railway and Other Companies")、スコットランドでのサケ漁の方法 ("The River Tay Salmon Fisheries")、教会間の信者の奪い合い ("The General Assemblies") などが「ベガー・マイ・ネイバー」だとして非難されている例がある。

⁴ "Beggar-My-Neighbour Policy" (近隣窮乏化政策) はイギリスの経済学者 J・ロビンソンが 1930 年代の世界的長期不況期の世界列強の貿易政策について名づけたもので、「他国の犠牲のもとに、自国の失業を減少させ、所得増加を図り、不況を輸出する貿易・為替政策」(『岩波現代経済学事典』554)。具体的には、為替レートを切り下げることによって輸出を増やし、その結果として相手国の失業を増大させるような政策をいう。最近では、中国の人民元安に関して、2008 年度のノーベル経済学賞受賞者ポール・クルーグマン (Paul Krugman) がこの言葉を使っている。自国の輸出を有利にするために為替操作をしているというのである。

⁵ 成長してから久しぶりに再会したピップとエステラは、ハワイシヤムの前で今度はベガー・マイ・ネイバーではなく、ホイストをすることになる (29 章)。年齢とともに、また階級上昇に応じて、ゲームも変化している。

⁶ 『パンチ』はパーマストーンを描くときいつもワラをくわえた姿で描いたが、実際にパーマストーンがそのような癖を持っていたわけではない。これはパーマストンの性質を表すものとして『パンチ』が生み出したトレードマークである。それはパーマストーンが馬好きだったことを表すと同時に、ディケンズ『ピクウィック・ペーパーズ』のサム・ウェラー的な冷静沉着さ、機敏さ、気さくさを表現している (Spielmann 203-04)。

⁷ カートゥーンの対面ページに掲載された "Beggar My Neighbour: An International Duet" という詩は以下の通りである。

<p>LOUIS</p> <p>"Come, Mr. Bull, your purse is full, Let's have a friendly game: See, here I play you my <i>La Gloire</i>, Now what's the card you name?"</p>	<p>"Your little game, my foreign friend, Is one that two can play: And he will be most sure to win Who can the longest pay.</p>
<p>JOHN</p> <p>"I play my <i>Warrior</i>, a good card, And one I'll freely back: Then follow suit with my <i>Black Prince</i>, The king of all the pack.</p>	<p>"But is it wise to waste our time (Nor is that loss the chief), In games that can do neither good, And may bring both to grief?</p>
<p>"And so for every card you play, You'll find that I'll play two; My purse is heavy as you say-- Who'll tire first, I or you?"</p>	<p>"Throw up your cards, I'll throw up mine, And cease this fruitless labour: There's better work for each to do Than Beggaring his Neighbour!" (<i>Punch</i> 23 March 1861: 120)</p>

なお、この詩は同日付の『タイムズ』にも同じタイトルで転載された。『パンチ』は土曜日の発行日が記されていたが、実際には 3 日早い水曜日に発売されていたのでこのようなことが可能になる。

⁸ 初の蒸気戦艦ナポレオンは 1850 年進水、1852 年就役。イギリスで最初から蒸気戦艦として計画され建造されたのは、1852 年進水、1853 年就役のアガメムノン。

⁹ 1861 年 3 月 16 日号の『パンチ』には、発表されたばかりの 1861 年度海軍予算を見て、その額が多くてびっくりしているジョン・ブルを描いたカートゥーンが掲載されている (111)。

¹⁰ この時点では労働者は必ずしも組合員ではなかったことがわかる。ロンドン・ドック・ス

トライキの成功がきっかけとなって、全国で非熟練労働者の組合作りが盛んになり、組合員数が急増する。1888年には75万人だったものが4年後の1892年には倍の150万人以上になった(Cole 246)。ロンドン・ドック・ストライキはロンドンの他の非熟練労働者を刺激し、次々にストライキが起きた。9月7日付の『イースト・ロンドン・ニューズ』は「ストライキ熱」という見出しを付けたほどである(Charlton 61)。

¹¹ 他の二点と違ってこのカートゥーンには対面ページに同名の詩がない。代わりに「多言無用 "Verb. Sap."」と題する4行詩が掲載されている。隣人同士お互いにもう少し思いやりを持ってばうまくいくのに、という趣旨である。

¹² ロンドン・ドック・ストライキおよび労働組合についてはCole第8章を参考にした。

¹³ 1889年のロンドンのガス・ストライキは一日8時間労働制を獲得したが、その数ヶ月後、あるガス会社は再び12時間交代制を強制した(Cole 243)。

参考文献

- "Beggars My Neighbour." *Punch, or the London Charivari* 23 March 1861: 120.
- "Beggars My Neighbour!" *Punch, or the London Charivari* 12 Oct. 1889: 174.
- "Beggars My Neighbour (From *Punch*) ." *Times* 23 March 1861:12.
- Charlton, John. "Class Struggle and Social Welfare." *Class Struggle and the Origins of State Welfare Reform*. Ed. Michael Lavalette and Gerry Mooney. London: Routledge, 2000. 52-70.
- Cobden, Richard. "The Three Panics: An Historical Episode." 1862. *The Political Writings of Richard Cobden*. Vol. 2. London: Ridgway, 1867. 211-427.
- Cole, G. D. H. *A Short History of the British Working-Class Movement: 1789-1947*. London: Allen, 1948.
- Dickens, Charles. "Great Expectations." *All the Year Round*. 1 Dec. 1860 - 3 Aug. 1861.
- "Foreign Intelligence." *Times* 20 Feb. 1864: 9.
- "The General Assemblies." *Times* 27 May 1885: 7.
- Harbin, Robert. *Waddingtons Family Card Games*. London: Pan, 1974.
- House of Commons Papers; Reports of Commissioners. *Copy of the Second Report made to His Majesty by the Commissioners Appointed to Inquire into the Law of England Respecting Real Property*. 1830 (575) .
- 伊東光晴編『岩波現代経済学事典』岩波書店、2004年。
- Krugman, Paul. "The Chinese Disconnect." *New York Times*. <<http://www.nytimes.com/2009/10/23/opinion/23krugman.html>>. 2 Dec. 2009.
- Lambert, Andrew. "Politics, Technology and Policy-Making, 1859-1865: Palmerston, Gladstone and the Management of the Ironclad Naval Race." *Northern Mariner* 8. 3 (1998) : 9-38.
- "Lord Hobart on Disarmament" *Times* 15 Jan. 1870: 4.
- Mitchell, B. R. and Phyllis Deane. *Abstract of British Historical Statistics*. Cambridge: Cambridge UP, 1962.

"Mr. Bright and Mr. Cobden." *Times* 16 Apr. 1859: 10.

"National Defences and the Relief of Distress." *Times* 27 Feb. 1886: 4.

"Police." *Times* 21 Sept. 1833: 4.

Porter, A. N., ed. *Atlas of British Overseas Expansion*. London: Routledge, 1991.

"Proposed New Ironclads." *Times* 1 Feb. 1864: 6.

"Railway and Other Companies." *Times* 6 March 1873: 7.

"The River Tay Salmon Fisheries." *Times* 17 Apr. 1873: 7.

Spielmann, M. H. *The History of "Punch."* London: Cassell, 1895.

田所昌幸編『ロイヤル・ネイヴィーとパクス・ブリタニカ』有斐閣、2006年。

Tenniel, John. "Beggar My Neighbour." Cartoon. *Punch, or the London Charivari* 23 March 1861: 121.

———. "Beggar My Neighbour!" Cartoon. *Punch, or the London Charivari* 12 Oct. 1889: 175.

———. "Face to Face!" Cartoon. *Punch, or the London Charivari* 7 Sept. 1889: 115.

———. "The Guinea-Fowl that Lays the Golden Eggs." Cartoon. *Punch, or the London Charivari* 14 Sept. 1889: 127.

"The Woolwich Inquiry." *Times* 26 Nov. 1861: 12.

"Verb. Sap." *Punch, or the London Charivari* 14 Sept. 1889: 126.